

特別史跡大湯環状列石

—発見から世界遺産登録までの90年—



大湯ストーンサークル館 木ノ内 瞭

はじめに

大湯環状列石が所在する秋田県鹿角市は、青森県と岩手県に隣接しており、北東北のほぼ中央に位置する市である。

北に十和田湖、南には八幡平の広大な自然が広がり、国立公園に指定されている。また、江戸時代から昭和後期にかけては尾去沢鉱山で銅などの多量の鉱石が



写真1 尾去沢鉱山

採掘され、2007年には「日本の地質百選」にも選定されている。こうした豊かな資源をもつ鹿角市では、ユネスコ無形文化遺産に登録されている「大日堂舞楽」や



写真2 大日堂舞楽

「山・鉾・屋台行事」の一つ「花輪祭の屋台行事」、国の重要無形民俗文化財の

「毛馬内の盆踊」など、豊かな民俗芸能が生まれ今日まで継承されている。

大湯環状列石は、鹿角市北部の大湯川と豊真木沢川の浸食によって形成された全長5.6kmの「中通台地」のほぼ中央に位置している。

遺跡は約4000年から3500年前の縄文時代後期に形成され、最大経約52mの万座環状列石と最大経約44mの野中堂環状



写真3 左：万座、右：野中堂

列石を主体とする遺跡で、特別史跡の指定面積は250060.60㎡にも及ぶ。

2つの環状列石は二重の円をしており、内側の円を「内帯」、外側の円を「外帯」と呼ぶ。両環状列石にはそれぞれ内帯と外帯の間北西の位置に「日時計状組石」



写真4 野中堂環状列石の日時計状組石

と呼ばれる数十個の石を特殊に組んだものが配置されているなど、全体の構造がとても似ている。また二つの環状列石の円の中心と各日時計状組石の計4点は、直線に結べる配置となっており、直線の延長線上は夏至の日没方向とほぼ一致し、遺跡の特徴でもある。

遺跡に使用されている約8500個の石の約6割は「石英閃緑玢（ひん）岩」と呼ばれる緑がかった石が使われており、遺跡から約7km離れた諸助（もろすけ）山が原産地とされている。この石は柱状節



写真5 石英閃緑玢岩露頭（諸助山）

理の性質を持っており、割れた石は山の下を流れる安久谷川に落ち、川を流れて次第に丸みを帯びていく。やがて遺跡から約2～4km離れた大湯川に流れ着いたものを縄文人が運び遺跡の形成に使用したと考えられている。また、遺跡に使われている残りの3割は十和田湖系の安山岩が使われており、縄文人も遺跡形成の際は、石の選定を行っていたのではないかと考えられている。

遺跡は昭和6(1931)年の中通台地上の耕地整理中に発見され、昨年の令和3(2021)年で遺跡発見から90年の節目の年を迎えた。今回、大湯環状列石の発見から世界文化遺産遺産登録に至るまでの90年間の歴史について、紹介したいと思う。

1. 大湯環状列石の発見と調査

①大湯環状列石の発見と大湯郷土研究会の発足

大湯環状列石の発見は昭和6年4月である。遺跡が所在する中通台地上に水田をつくる計画が立ち、大湯安久谷川から山伝いに用水路を建設していたところ、野中堂環状列石の一部が検出された。同年6月「大湯村外二ヶ村耕地整理組合」の会長であった諏訪富多は、秋田県史蹟名勝調査委員長に宛てた『先住民遺蹟調査申請書』に環状列石の発見の報告と、遺跡の調査を依頼している。この依頼を受け、同年7月調査員であった武藤一郎が遺跡の調査を行い、この時の調査については同年12月刊行の『秋田県考古学会誌』の「鹿角郡大湯町に於ける遺跡の研究」の中で報告している。

昭和8年3月には諏訪富多、高木新助、浅井小魚を中心に大湯環状列石の調査と保護を目的とした「大湯郷土研究会」が発足された。また当時大湯町周辺の遺跡を精力的に踏査していた浅井小魚らが秋田県史蹟名勝調査会宛に遺跡の再調査依頼をしたことで、昭和8年5月5日に武藤一郎が遺跡の再調査を行い、9日には郷土研究史家であった深沢多市が視察を行った。22日には浅井の熱心な調査要請と深沢の調査報告を受け、東北帝国大学の喜田貞吉が遺跡の視察を行っている。喜田は全国に類例がなく更なる調査が必要であると遺跡の重要性を説き、遺跡に「中通遺蹟」と仮称をつけた。

しかし、社会の情勢不安などにより遺跡の発掘調査はなかなか実施できない状況だったことから、昭和12(1937)年に大湯郷土研究会は石標を野中堂環状列石の北西側に設置し、遺跡の保存に努めることに留まった。石標は現在移設され、大湯ストーンサークル館から遺跡に向かう入口で見ることができる。



写真6 大湯郷土研究会が建てた石標

②昭和期における遺跡の発掘調査

大湯環状列石1回目の発掘調査が行われたのは昭和17(1942)年の神代文化研究所によるものだった。神代文化研究所は皇国史観と深く関わる「竹内文書」や「上記」を研究する団体として昭和10(1935)年に東京弁護士会の多田井四郎治と陸軍予備役少将河村圭三によって設立された。

神代文化研究所の多田井は大湯郷土研究会の諏訪富多と懇親を深めていたこともあり、昭和17年の7月から10月にかけて両会による野中堂環状列石の発掘調査が2度にわたり行われた。この調査により、それまで土の中にあった野中堂環状列石の石は表出された。神代文化研究所の考古学部門を担当していた吉田富夫は、石は雑然と環状に並べられているのではなく、石を円形や方形などに配置した石囲(組石遺構)から環状列石は形成されていると指摘した。

2回目の発掘調査は、戦後間もない昭和21(1946)年から昭和23(1948)年に、考古学者である甲野勇が朝日新聞社の援助を受けて、大湯郷土研究会や秋田県教育委員会などと合同で発掘調査を行っている。甲野はこの調査で野中堂環状列石に所在する日時計状組石が投影する影から季節を知らせるための時計なのではないかと指摘し、縄文時代から農耕が行われていたと考察した。

調査に参加していた後藤守一は、万座・野中堂両環状列石を「大湯遺跡」として総称し、今回の調査では野中堂環状

列石の実測図の作成を行い、後の文化財保護委員会による調査時に精度の高い図面へと仕上げている。

昭和26(1951)、27(1952)年には、現在の文化庁の前身となる文化財保護委員会による発掘調査が行われている。文化財保護委員会主任調査官であった斎藤忠を発掘調査責任者とし、甲野勇、後藤守一、江坂輝弥、長谷部言人、八幡一郎などが調査を行った。この調査では環状列石の形成された年代および遺跡の性格を明らかにすることとともに、調査当時にすでに環状列石を構成する石の移動が明らかなものについては、もとに戻し、保全の万全を期すことを目的としていた。



写真7 文化財保護委員会による調査風景

昭和26年の調査では、後藤、八幡を中心に両環状列石と環状列石を構成している組石遺構の実測図の作成を行い、「九型式五種」の分類を行っている。

昭和27年の調査では組石遺構の中から、野中堂で5基、万座で9基の計14基の組石遺構下の発掘調査が行われた。調査の結果、14基中11基の組石遺構下から、屈葬であれば埋葬可能な大きさの土坑が伴うことが確認された。また土坑内のリン酸分析では、リン酸濃度が高いものが1例確認された。これらのことから斎藤は、大湯環状列石は縄文時代後期に属し、環状列石は墓の集合体である「墓域」の可能性が高いことを指摘した。

これらの調査より大湯環状列石は昭和26年に国史跡、昭和31(1956)年に国特別

史跡に指定された。昭和初期に喜田貞吉によって「中通遺蹟」と仮称されていたが、国史跡指定時から「大湯町環状列石」が正式の遺跡名として使用され、昭和31年には大湯町と毛馬内町が合併し、十和田町となったことから、昭和32(1957)年に「大湯環状列石」に遺跡名を変更し、現在に至っている。

③鹿角市教育委員会による発掘調査

鹿角市は昭和47(1972)年に花輪町、尾去沢町、十和田町、八幡平村の4町村が合併し、誕生した。この当時全国的に土地の大規模開発が行われた時代で、大湯環状列石が所在する台地縁辺部においても大規模な土砂採取が行われ、また農業の近代化に伴い、農機具の大型化が進んだことから、大湯環状列石周辺に分布する遺構の存在が危ぶまれるようになった。このような状況から、秋田県教育委員会と鹿角市教育委員会は、昭和48(1973)年に緊急分布調査、昭和49(1974)年から昭和51(1976)年の3カ年で詳細分布調査を行った。

この計4カ年にわたる調査で、野中堂

環状列石北東約250mの位置に配石遺構群（一本木後口配石遺構群 a 群）が存在すること、万座環状列石南約150mの地点や、野中堂環状列石南約180mの地点でも配石遺構が分布することがわかった。

これらの調査結果からそれまで野中堂・万座の2つの環状列石のみしか周知されていなかったが、遺構・遺物の分布状況から遺跡の範囲が広範囲に広がることがわかった。

鹿角市教育委員会は緊急分布調査と詳細分布調査をもとに昭和53(1978)年に『特別史跡大湯環状列石保存管理計画書』を策定し、昭和59(1984)年から大湯環状列石の発掘調査を開始した。この調査は平成20(2008)年までの25次にわたり行われた。

詳細分布調査で確認された一本木後口遺構群 a 群44基の組石遺構下の調査では、ほぼ全ての組石遺構下に屈葬であれば大人を埋葬できる大きさの土坑が伴うことが確認され、一部の土坑からは副葬品と



図1 分布調査からの史跡推測範囲



図2 現在の特別史跡の範囲



写真8 組石遺構下の土坑

と思われる石鏃（矢の刃部）や漆塗りの木製品、土器棺が出土した。この結果は昭和26、27年に行われた文化財保護委員会の調査で14基中11基の組石遺構下に土坑が確認された点と一致しており、1つ1つの組石は墓で、それが集合する一本木後口配石遺構群および野中堂・万座の両環状列石は墓域である可能性がより高いものとなった。

また環状列石周辺からは、掘立柱建物跡やフラスコ状土坑、土坑などの遺構が検出され、遺物では鐸形土製品、土偶など祭祀の際に使用されたと思われるものが多量に出土したことから、現在は「墓域」と「祭祀場」の2つの性質を持つ遺跡であると考えられている。

3. 環境整備事業

鹿角市教育委員会では昭和53(1978)年に遺跡の保存と活用について、

- (1) 史跡の追加指定と民有地の国有化
- (2) 発掘調査による遺跡の解明
- (3) 遺構の復元と資料館の建設

を柱に活用・整備基本方針を策定し、『特別史跡大湯環状列石保存管理計画』を刊行した。

平成元(1989)年には「特別史跡大湯環状列石環境整備検討委員会」を設立し、平成4(1992)年に環境整備の構想の基本理念や指針を『特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想』にまとめ、平成7(1995)年には具体的な方針をまとめた『特別史跡大湯環状列石環境整備基本計画』を策定した。

平成8(1996)年から平成9(1997)年にかけては、主に2つの環状列石を中心に整備の基本方針と遺構の復元方法、ガイダンス施設である大湯ストーンサークル館の目的・機能・活用等の検討を行い、環境整備事業の前提条件を整えた。

平成10(1998)年から平成28(2016)年に4期にわたる環境整備事業が開始された。



写真9 環境整備前(昭和60年頃)

野中堂・万座の両環状列石は、継続して露出展示を行うこととなり、発見から70年の月日の中で石に発生した苔や藻、地衣類を配石遺構下および周辺土壤に影響を及ぼさないよう洗浄、撥水処理等の保存処理を行った。

環状列石周辺の石列や環状配石遺構などの配石遺構は発掘調査の埋戻し後、その上に約50cmの保護盛土をした後、同等の自然石を配置し遺構の復元を行っている。また、万座環状列石周辺に復元を行っている掘立柱建物も配石遺構同様、保護盛土をした後柱穴のあった箇所にクリの柱を建て、建物の復元を行っている。建物は現在も随時サシガヤを行い保全に努めている。

この他に発掘調査の結果をもとに沢地やフラスコ土坑(貯蔵穴)が20基見つかった蓄えの丘などの地形復元を行い、縄文時代当時の地形に近づけている。また、野中堂・万座の両環状列石が露出展示を行っていることから、遺跡から現代物を遮蔽するように植栽を行っている。植えている樹木については、発掘調査で出土した炭化した木の実や樹木の花粉の化石などをもとに縄文時代に生えていたと思われるクリ、トチノキ、ブナなどを植栽し縄文時代の環境に近づけている。



写真10 環境整備後(令和元年撮影)

平成14(2002)年4月には、大湯環状列石のガイダンス施設として、体験学習を中心とした活用拠点施設「大湯ストーンサークル館」が開館し、展示ホールでは大湯環状列石から出土した遺物の展示や

模型などを用いて遺跡の解説を行っている。また、土器づくりや勾玉ペンダントづくりなどの体験学習が常時行える。令和3(2021)年9月には入館者が50万人に達し、また令和4(2022)年の今年には開館から20周年の節目の年を迎える。



写真11 大湯ストーンサークル館外観



写真12 展示ホール

4. 「北海道・北東北の縄文遺跡群」としての大湯環状列石

大湯環状列石の世界遺産登録に向けた動きは平成18(2006)年、北秋田市の伊勢堂岱遺跡とともに「ストーンサークル」として世界遺産暫定一覧表の提案書を文化庁に提出したことに始まる。同年に青森県を中心に青森市、八戸市、つがる市、七戸町が「青森県の縄文遺跡群」として提案書を提出し、平成19(2007)年に北海道・北東北知事サミットにおいて「北海道・北東北の縄文遺跡群」として4道県が共同提案することが決定した。平成21(2009)年にユネスコ世界遺産委員会事務局において「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」として世界遺産暫定一覧表に記載された。その後構成資産の見直しと、推薦書素案の改訂をくり返し、令

和2(2020)年1月に日本政府が「北海道・北東北の縄文遺跡群」としてユネスコに推薦を行った。同年9月4日から14日にかけてユネスコの諮問機関であるイコモス(国際記念物遺跡会議)による現地調査と推薦書の書類審査が行われた。その結果、先史時代における農耕を伴わない定住社会と、その発展段階や様々な環境変化へ対応していく中で、複雑な精神文化が営まれたことが示されている資産として、令和3年7月27日に第44回世界遺産委員会拡大大会において「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産リストへの記載が正式に決定した。



写真13 登録決定時

大湯環状列石が形成された縄文時代後期は、寒冷化が進み、大規模な集落から小規模な集落が分散していく時代へと変化する。その中で環状列石などの共同の祭祀場や墓域が形成される時代になる。「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する17資産の中で、大湯環状列石は、こうした縄文時代後期の時代背景を顕著に示す遺跡として重要な位置を占めている。

おわりに

大湯環状列石は、今回紹介したように昭和6年の発見から地域住民により、早い段階で遺跡の保存活動や有識者への発掘調査の働きかけがあったことで、現在まで良好な状態が保たれ、遺跡の調査や環境整備が行われた。

こうした保護や調査、整備活動の他に地域の方たちによる遺跡の活用が行われ

ている。

昭和59(1984)年には、地元商工会青年部が中心となり、地元小中学生が大湯環状列石への理解を深められる機会として「古代焼き大会」を始めた。現在は「ストーンサークル縄文祭」へと改称し、土器焼きや縄文体験などの体験を通じて遺跡や縄文時代について理解を深めている。



写真14 ストーンサークル縄文祭

また大湯環状列石のガイド団体「大湯SCの会」は、令和元(2019)年に前身となる「ボランティアガイドの会」の活動を引き継ぎ、地域の人々によって組織された。令和3年は900件以上のガイドを行い、市内外の多くの方たちに大湯環状列石の魅力を伝えている。



写真15 大湯SCの会によるガイド風景

この他に近年では地元菓子店により出土品の「土版」を模した「どばんくん



写真16 発掘調査で出土した「土版」

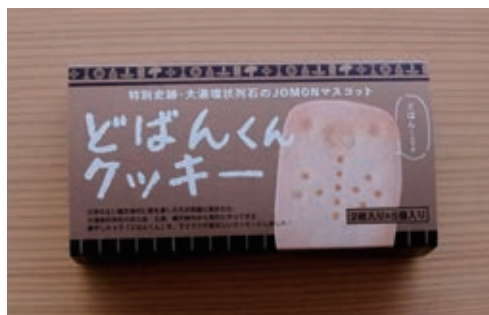


写真17 どばんくんクッキー

クッキー」が作られ、道の駅などのお土産の一つとして人気を博している。

大湯環状列石は、地域の人々をはじめ多くの人々が、保存や活用といった活動を積極的に取り組んだことで、遺跡が良好な状態で保たれ「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産一つとして、今回の世界遺産登録につながった。

ぜひ、現在まで守り続けられている大湯環状列石を現地にて見ていただき、縄文時代を体感していただきたい。

【参考文献】

- ・大湯郷土研究会 1973『特別史跡大湯環状列石発掘史全編』
- ・大湯郷土研究会 1998『大湯ふるさと探訪』
- ・鹿角市教育委員会 2017『鹿角市文化財調査資料第110集 特別史跡大湯環状列石総括報告書』
- ・文化財保護委員会 1953『埋蔵文化財発掘調査報告第二 大湯町環状列石』